



訣別

の森

第54回

江戸川乱歩賞

受賞作

末浦広海

Sueura Hiromi

講談社
文庫





講談社文庫

常州大学図書館
蔵 訣別の森 章

末浦広海

講談社

|著者| 末浦広海 1964年、兵庫県生まれ。関西学院大学経済学部卒業。
2008年に、第54回江戸川乱歩賞を本作で受賞。著書には他に、『捜査
官』『白き失踪者』（ともに講談社）がある。

けつべつ もり
訣別の森

すえうらひろ み
末浦広海

© Hiromi Sueura 2011

2011年8月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277045-3

訣別の森／目次

第一章	折れた翼	9
第二章	遠ざかる影	137
第三章	重なり合う影	216
第四章	猛き咆哮の果て	304
エピローグ		389
解説	細谷正充	407



講談社文庫

訣別の森

末浦広海

講談社

訣別の森／目次

第一章	折れた翼	9
第二章	遠ざかる影	137
第三章	重なり合う影	216
第四章	猛き咆哮の果て	304
エピローグ		389
解説	細谷正充	407

東部



北海道



訣別の森

第一章 折れた翼

1

出勤要請の受付を終了する午後六時まで、残すところ一時間半となった。

こんな時間まで一件の連絡も入らないなんて、この半年間で初めてだった。こうして自分たちの出番が来ないまま、平穩無事に本日の業務が終わってくれないものだろうか。一度ぐらい出勤回数ゼロの日を味わってみるのも悪くない。そんな願いを三人で言葉にし合い、安閑とした空気にひたりかけていた。

その時、電話がけたたましい電子音を響かせた。

榎村博樹まさむらひろきは反射的に椅子から腰を上げた。まだ光沢を残す白い壁の時計に目をやれば、液晶パネルの数字が午後四時三十二分二十三秒を示している。

ところどころを修正テープにより補修された分厚い整備マニュアルに目を落としていた倉石篤志も、先に行きますと榎村に言い残し駆け出した。

眉間に深い縦皺たてじわを刻みながら信田豊しのだゆたかが応対する電話は、北海道東部に点在する各消防本部からドクターヘリの出動要請を受けるためにのみ設置された、専用のホットラインだ。

榎村は倉石が開け放ったままのドアの前まで進み、いつでも飛び出せる態勢で指令を待った。応答する信田の言葉とその険しい表情から、おおよその見当はついたが、早合点は禁物だ。

「幌萌町の国道335号線でオートバイによる単独の転倒事故。運転者が意識不明。ポイントポイントは総合運動公園」

焦りの色を漂わせた信田が、送話口を右手で押さえつつ早口でまくし立て、急せぎ立てるようにこちらを目で促した。

榎村は頷うなずき返してから、東棟最上階の運転司令室を飛び出し、屋上に続く階段を目指した。全身の筋肉を稼働させ、部外者の立ち入りが禁じられた階段を駆け上がりながら、頭の中へ叩き込んだ道東の地図を冷静に思い浮かべてみる。

幌萌町——。少しばかり厄介なことになりそうだ。

目指す幌萌町は知床半島しれとこの根室海峡側に位置し、羅臼らうすから南へ十五キロメートルほど下った、ごく小さな漁師町だ。現場近くの総合運動公園が、傷病者しょうびょうしやを搬送して行く羅臼消防署救急隊員との合流地点、いわゆるランデブー・ポイントに指定されており、救急車輛の出動とともに別働隊がそちらへ急行し、万全の準備を整えてこちらを誘導してくれる手筈てはずだから、着陸には何も問題はない。

合流後、救急救命のプロフェッショナルである医師と看護師がヘリコプターから降り立ち、現地で即座に傷病者を施療することにより、救命率の飛躍的な向上が可能となる。

それに、先ほど定時確認したばかりの気象庁の最新情報によれば、羅臼方面は曇天ながらも、濃い霧の発生や雷雨、強風などは観測されていなかった。安全最優先のため、日の出から日没までの明るい時間帯での有視界飛行を義務づけられているドクターヘリだが、この天候ならフライト自体にも差し障りさわはない。ただし、距離があつた。

北見市街の南部に位置する恵愛会北見若松総合病院から現地まで、直線で優に百キロメートルある。巡航速度が時速二百キロを上回るヘリコプターとはいえ、二十五分はみておかねばならない。十五分以内に現地到着、施療開始を目標とするドクタ

ーヘリにとつてはかなりの長駆となり、広大なエリアをカバーするこの病院ならではの例外的な出勤と言つてもいい。しかも患者は意識不明だという。信田がこちらを急^せかせるのも無理はなかった。

逸^{はや}る気持ちをバネに変え、一気に階段を上りきつた。

そのまま勢いを殺さず、体ごと扉にぶつかり屋上へと躍り出る。本州以南では蒸し暑い梅雨だが、うすら寒い冷気が全身を包んだ。

三十メートル先のヘリポートには、雲のたれ込めた灰褐色^{はいかつしよく}の空をキャンバスとして、白地に赤の帯という特徴あるペイントを施^{ほどこ}されたドクターヘリの機体が、目にも鮮やかに映えている。

全力で屋上を駆け抜け、倉石が開けておいてくれたドアから操縦^{そうじゆう}席へと体を滑り込ませた。医療資器材が満載され消毒を欠かさないために、独特のアルコール臭が染みついてはいるが、今ではすっかり慣れ親しんだ匂いだ。ドアを勢いよく閉じると同時に、一連の動作でシートベルトを締め、無線通信も機内通話も可能なヘッドセットの内蔵されたヘルメットを装着した。

機体の前方では、榎村同様ヘルメットにフライトスーツ姿の倉石が、両手で大きな円を描き、離陸に何も支障がないのを知らせている。航空整備士の彼が一足早く屋上

へと向かったのは、機体の点検、周囲の状況や天候などの確認のためだ。いつものことながら、すべてにそつなくお膳立てしてくれていた。

頼れる相棒にひとつ合図を送り、スタート・ノブを捻った。

道東民の期待を一身に背負い、集約型僻地広域医療を実現するために配備されたドクターヘリ、ユーロコプター社製 EC135P2i のツインタービン・エンジンが、低い唸りとともに動き始めた。

通常、ヘリの始動には煩雑な操作が必要だが、この機は立ち上げを極力簡略化するという設計思想のもとに開発されていた。ドクターヘリとして採用される機体には、低騒音や低振動、安全性、適度なキャビンスペースなど、様々な機能を求められるが、コンピュータ制御による始動の簡便性も重要な要素のひとつだ。

速やかに各種計器類を操作、確認し、着々と離陸の態勢を整えながら、搭乗する二人の医療スタッフに思いを馳せた。

フライトドクターは何度も出動経験のあるベテランだが、フライトナースは今日が初めての任務となる。前任者が先週から育児休暇に入り、後任に抜擢された上島茂基は若いながらも ICU での経験が豊富で、周りからの評価も上々だ。だが初フライトともなると緊張や気負いもあるだろうし、現場は環境の整備された病院内とは勝手が